

牛久：学校周辺に見る自然

第59号 ひたち野うしく小（ひたち野西近隣公園）

2011年12月13日発行

＜ 秋の水辺公園、生きものたちの冬越し準備 ～9. 鳥 ＞

11/8,ひたち野うしく小4年生との水辺公園,秋の生きもの観察。最後に、鳥たちの冬越しふゆごしについて。この日は、鳥のすがたがあまり見られず、カルガモとコガモだけが目だっていました。それで、前後2週間いっしょくらいの間に水辺公園で見られた鳥も、一緒に紹介することにしました。



水辺公園で多く見られる冬鳥のコガモ。群れて泳いだり、くいの上にとまっていたりする。右上のすみの写真はオス。

鳥たちの中には、秋に、寒い北の国からやってきて、日本で冬を越し、春にまた北へもどってひなを育てるものがあります。このような鳥たちを、日本では「冬鳥」と呼びます。（ツバメなどは、寒い冬を南の国で過ごし、春に北の日本にやってきて子育てをするので「夏鳥」という：教科書4年-2、19ページ参考。）写真のコガモもそうです。田んぼの落ち穂や、石についている藻もを食べるそうです。



こちら冬鳥で、ハシビロガモ。名前の通りくちばしはばひろくが幅広く、オスの頭は光沢こうたくのある緑色で目立ちます。くちばしにある歯ブラシ状のもので水をろ過し、プランクトンを食べるそうです。それで幅広くくちばしに進化したのでしょうか？同じ水辺にすむカモの仲間でも、いろいろと違ちがいますね。何種類かが一緒に泳いでいることも多いので、注意してみてください。

↑ プランクトンをこしとって食べる冬鳥、ハシビロガモ。前がオス。



↑ 左から、①カワウが池を泳ぎ、②水にもぐって魚を捕え、③岩に上がり、④羽を広げて乾かす。



さて、ここからは、一年中、日本で見られる鳥たち。こういう鳥を「留鳥(りゅうちょう)」といいます。まず、大きくて黒く目だつカワウ。水中にもぐって魚を捕えますが、もぐりやすいように羽が水をはじかないつくりをしているので、水から上がった時には羽を広げて乾かしているのをよく見ます。^{かわかし}繁殖期が近づくと、左の写真のように、頭部とあしのつけ根のあたりが白くなってきます。

←繁殖期には、頭部とあしのつけ根が白くなる。



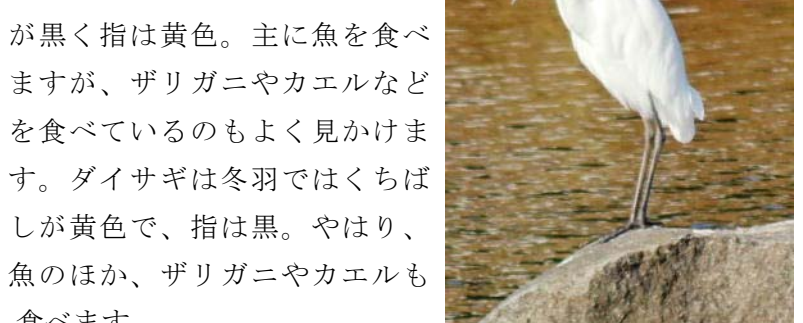
青灰色の体と、黄色のくちばしが特徴のアオサギ。繁殖期以外は、主に夜行性。高い木の上にとまった(左)。

次は、「シラサギ」と呼ばれる仲間。写真は、日本最大のサギ、アオサギ。体は青灰色で、くちばしは黄色。池の上を飛び回ったあと、高い木の上にとまりました。魚やカエル、ヘビやネズミ、鳥のひなまで食べてしまうそうです。

左下の写真はコサギ、そして右はダイサギ。違いが分かりますか？どちらも全身まっ白ですが、コサギはカラスくらいの大きさで、くちばしが黒く指は黄色。主に魚を食べますが、ザリガニやカエルなどを食べているのもよく見かけます。ダイサギは冬羽ではくちばしが黄色で、指は黒。やはり、魚のほか、ザリガニやカエルも食べます。



↑黒いくちばしと黄色の指が特徴のコサギ。



黄色のくちばしと黒い指が特徴のダイサギ ↑



顔の2本の黒線とくちばしの先の黄色が特徴のカルガモ。水辺の草むらに巣をつくる。夜行性で植物の種子を食べる。



こちらは、皇居のお堀への親子での引っ越しで有名になったカルガモ。最小のカモのコガモと似て見えるかもしれませんが、こちらはカモの仲間では大きい方で、くちばしの先が黄色いのも特徴の一つです。水辺の草むらに巣をつくりませんが、私に気がついたのか、左の写真のように頭をかくして丸まり、身をふせて、じっとしてしまいました。夜行性で、植物の種子などを食べるそうです。



つがいになる可能性が高い、セグロセキレイ（左）とハクセキレイ（右）。

春にヒキガエルのおタマジクシがまっ黒に集まっていたあたりでは、2羽のセキレイがよくえさを食べています。左がセグロセキレイで、右はハクセキレイ。セグロセキレイは日本にしかないセキレイで（こういうのを「固有種（こゆうしゅ）」といいます。）、秋の終わりにつがいになり、2羽で越冬するそうです。この2羽、いつも一緒にいるのですが、別種でもつがいになるのでしょうか？ハクセキレイのもようには差があり、セグロセキレイによく似たものもいるようですので、どちらもハクセキレイである可能性もありますが、実際にこれら2種がつがいになり、ひなをかえしたという記録もあるので、今後を見守りたいと思います。どちらも、昆虫類を主に食べるそうです。



最後に名前だけ。左からハシボソガラス、スズメ、カワセミ、ホオジロです。【理科支援員 宮内】